



みんなで防ごう土砂災害 「土砂災害防止月間」

6月1日～6月30日

毎年各地で土砂災害が発生しているため六月を土砂災害防止月間として国と都道府県が市町村などと協力し「みんなで防ごう土砂災害」をテーマに様々な活動をしています。土砂災害防止月間の取り組みの一つとして土砂災害に関する絵画・ポスター・作文をみなさんから募集しています。
この作文には、鹿児島県の中学生が土砂災害について教わったこと考えたことを作文に書いてみました。みなさんも土砂災害について家族や近所の人に聞いて思ったこと考えたことを作文に書いてみましょう。

「自分でできること」

令和四年度 土砂災害防止に関する作文部門 国土交通事務次官賞 生徒の部
鹿児島県 奄美市立朝日中学校 二年 福元 愛渚（ふくもと まな）

「また、雨が続けているのか。」
今年の夏は、東北地方のニュースを見るたびに心配になった。私の大好きなりんごが泥水で腐り、家や車が水に浸かり、道路が陥没している映像の数々。中には、土砂災害で建物が押し流されているのを見ることがある。『せっかくのお盆なのに。どんなに困っていらっしゃるんだろう。』と切ない気持ちになった。
「あつという間に水が上がってきた。とても逃げられない。これから、何か手を付けられればいいのか。」と、落胆して、ぼう然と立ち尽くす人々。災害の恐ろしさを温感した。

近年の温暖化のせいだろうか。「百年に一度」と言われるような大雨がたびたび降り、水害が毎年、日本どこどこで起こっている。八月の一分分の雨が、一日で降ったという。

私の住んでいる奄美は、台風もよく通り、大雨に見舞われることも多い。四年前の九月の台風では、私が通っていた朝日小学校の裏山が崩れた。その道を通る人たちは、速回りをして登下校をしていた。今年四月に大島支庁の土木建設課の方々による「土砂災害防止」の山前授業があった。実際に起こった地滑り、土石流等の映像を見せてもらった。本当に地面が滑り、木々や電柱が跡形もなく流れていく映像に驚いた。自然の脅威の前に人間は、無力なのだ。と、然とさせられた。
また、災害を防ぐためにがけを法特工で固めたり、「砂防ダム」を建設したりしていることも教えてもらった。砂防ダムの効果についてビー玉を用いた実験

を見せてくれた。砂防ダムがあると、土砂に見立てたビー玉の大半は、止まり、家屋は守られることがよく分かった。私は、登校時に「砂防ダム、建設中です」と書かれた看板を見つけた。砂防ダムの効果を知り、とても安心できた。
大島支庁の方が、こう語られた。
「情報を知り、やはり『早めの避難』が一番大切です。このことは、お家の人も話し合ってくださいね。」
私は、東北地方の大雨の映像を見ながら、母と土砂災害について話し合った。母は、こんな話をしてくれた。
「今年、鹿児島市で起こった八・六水害から二十九年経つけど、ちょうど、お母さんが働き始めた年だね。その年の八月三日は、お母さんが住んでいた地域でも、水害があったのよ。その時、お母さんは、国分の町に買い物に行っていて、戻ってきたら、びっくり。すぐに天降川が堤防を越えて氾濫していて、お母さんの住んでいたアパートの駐車スペースは、水がたまってたのよ。水は、瞬く間に増えて、アパートの一階は、水に浸かってしまったの。そして、何より悲しかったのは、お母さんの働いていた学校に通っていた女の子が、土砂崩れに巻き込まれて亡くなってしまったのよ。何年経っても忘れられない出来事だよ。」

私は、母の話聞いて、改めて、自然災害は恐ろしいことだと感じた。自然災害は、身近な人や大切な人の命さえ奪うときがある。その女の子の家族は、どんなに悲しかっただろう。そう思うと、胸が痛くなった。

「想定内へ変えるために」
「ここで、大きな土砂崩れがあったんだよ。」
八月六日、車で電ヶ水の水の国道を走っていた時、母が言った。大きな土砂崩れ。それは、私が生まれていない一九九三年の八月六日に起こった、ハチロク水害のことだった。気になって調べていた時に、電ヶ水で起こった土石流の再現映像を見つけた。人々のために災害と戦ったある警官の話だ。
その年、冷夏や豪雨など、日本各地で異常気象が起きた。いつまでも梅雨明けしない鹿児島付近では、梅雨前線が停滞し百年に一度の大雨に見舞われていた。電ヶ水駅では、運行していた電車が線路が冠水し、その反対側を土石流で塞がれた。その結果、電車内で六五〇人が孤立してしまった。夏休み中ということもあって、電車も混み合っていたそう。このあたりりの地層は硬い岩盤に軽石が薄く張り付いており、また、急斜面の谷が多く重なり合う地形のため水害や土砂崩れが起きやすい、と映像の解説にあった。一九七七年にもこの場所で大規模な土砂崩れが発生し、九人が死亡している。危険だと判断した車掌は乗客を国道に避難させた。しかし、国道は車が多すぎて通行が難しく、泥水に流れ込んでくるため逃げ場はなかった。そして、全員が避難した頃に二度目の土石流が発生。人々はパニック状態になっていた。桜島フェリーが救助要請を出されていた中、桜島の裏側からも漁船が救助に向かっていた。養殖イカダや漂流物が多く、大きなフェリーでは接岸できない場所があったからだ。そして、三度目の土石流が発生し、逃げ遅れた十名が海に投げ出されてしまった。死にかけていた警官官だったが瓦礫を押ししま

「想定内へ変えるために」

げ、土石流から生還した。そして自分が負った怪我を忘れ、救助に移った。漁船がやってきた漁師たちも、骨折した人やお年寄り、小さな子供を優先に救助を始めた。国道は膝上まで冠水していたイカダにつかまっていた凍えている人も救助し、最後の船が出た。警官の八時間の死闘が終わった。危険にさらされた六五〇の大切な命。全員は助からなかった、と彼は泣いていた。私は死にそうな体で最後まで救助を行った。私が以前住んでいた場所でこのような大きな災害があったことを私は知らなかった。今住んでいる島も無縁ではない。私が小学四年生の時、喜界町で五十年に一度の大雨が降った。その時の道路は泥水で溢れて、たくさん車の車が行き交っていた。親が子どもたちを学校に迎えに行っていたから。きっと、電ヶ水付近もこのような状態だったのだと思う。それに加えて逃げ場もなく、いつ土石流が発生するかも分からない。人々がこの恐怖と寒さ、不安でパニックになってしまふのは当然だと思った。

私たちがこのようにパニック状態になってしまふのは、「想定外」だからであると考えられている。百年に一度だからと言って、ハチロク水害は決して特別ではない。普段からの備えをしておくことによって想定内にしなくてはならない。その大切さを専門家は私たちに訴えている。

私たちが訓練をする意味や昔の災害について学校で何度も学習する意味がよく理解できた。人間は自然災害に抗えない。「想定外」を「想定内」にするために地域の人々は真剣に取り組みを考えてくれている。

一人一人が過去の出来事について理解し、訓練のときには真剣に取り組む。そして、今ある知識を周りの人に伝えることが大切だと思う。ハチロク水害の大きな原因は、異常気象だった。私たちは今、異常気象の中に生きている。地球温暖化が進み、降水量も増えてきている。土砂災害の危険は十分にあり、他人事ではないのだ。「想定内」の状況に近づけるため、これからの生活を変えていこうと強く思う。

令和四年度 土砂災害防止に関する作文部門 国土交通事務次官賞 生徒の部
鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三年 小山 光（こやま ひかり）